

ラストサムライと呼ばれた男達-中島三郎助と土方歳三

高尾 隆

追憶の中の剣豪

私が歴史に傾倒していった原点はと問われたら、それは幼少期に兄弟そろって夕餉の前に耳を傾けたラジオ時代劇と言えます。

■『新諸国物語笛吹童子』新諸国物語の第2作
1953年(昭和28年)1月5日～12月31日に放送

ヒヤラリヒヤラリコ ヒヤリコヒヤラレコ

誰が吹くのか ふしぎな笛だ

ヒヤラリヒヤラリコ ヒヤリコヒヤラレコ

音も静かに 魔法の笛だ

ヒヤラリヒヤラリコ ヒヤリコヒヤラレコ

タンタンタンタン タンタンタンタン

野こえ 山こえ

■1954年(昭和29年)4月映画化／東映

主演中村錦之助(菊丸)東千代之介(荻丸)

■NHKラジオドラマ『新諸国物語 紅孔雀』

1954年(昭和29年)1月4日～12月31日

■1954年(昭和29年)12月映画化

主演中村錦之助(那智の小天狗)

まだ見ぬ国に 住むという

赤きつばさの 孔雀鳥

ひめし願いを 知るとい

ひめし宝を 知るとい

■まんが『赤胴鈴之助』

1954年『少年画報』8月号に連載。竹内つなよし
が執筆。1960年(昭和35年)12月まで掲載。

剣をとっては 日本一に

夢は大きな 少年剣士

親はいないが 元気な笑顔

弱い人には 味方する

おう! がんばれ 頼むぞ

ぼくらの仲間 赤胴鈴之助

■1957年(昭和32年)1月7日ラジオドラマ化

当時小学生だった吉永小百合が出演。

ほぼ同時期からテレビドラマ化 大阪朝日放

送 TBSテレビが双方制作・放送



本物の時代劇との出会い=戦の本質を知る

70年の時を経てもあせることのない日本の名映画。サムライ日本を世界に知らしめた時代劇「七人の侍」。

映画『七人の侍』1954年(昭和29年)

監督は黒澤明、主演は三船敏郎と志村喬。

2018年にBBCが発表した「史上最高の外国語映画ベスト100」で1位に選出。またハリウッドを含む歴史上の映画で最高の映画100選に7位に選ばれる。

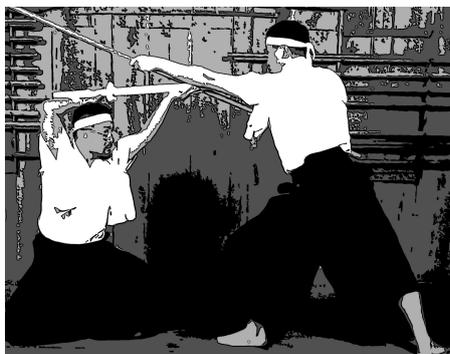


侍の七人中最高の剣豪は無敵ではなかった

剣の道(技)はいつ頃生まれたのか?

そのルーツは神官と坊主にあった。

関東七流(鹿島七流)／古墳時代中期、常陸国鹿島に関東七流(東国七流)という、日本初の剣術流派(鹿島神流)が生まれた。7人の神官が古くから伝わる剣術を東国を中心に広めた。



鹿島神流

平安時代になると、日本の製鉄技術は大陸と遜色ないレベルにまで達した。さらに、真っ直ぐな剣から、湾曲して人を斬りやすく、また馬上での戦いに適した形に進化し、日本刀の基本形ともいえる太刀が登場する。

京八流／平安時代後期、京都鞍馬山で京八流が生まれた。源義経が鞍馬で修行中、鬼一法眼という天狗に剣を学んだという伝説があるように鞍馬寺の8人の僧に伝えられた剣法が京八流といわれている。

鬼一法眼は京の一条堀川に住んだ僧侶の身なりの陰陽師法師。『六韜』という兵法の大家でもあり、文武の達人とされる。源義経がその娘と通じて伝家の兵書『六韜』を盗み学んだという話で有名。また剣術においても、京八流の祖として、また剣術の神として崇められている。

関東七流とともに多くの流派の母体となる。

関東七流は神官、京八流は僧が担い手であった。



「鬼一法眼三略巻」虎の巻(兵法書)を手に入れんと争う歌舞伎にも扱われる

■武士とは

武士たる人は武藝をしらずんばあるべからず。弓馬、刀剣、槍、長刀、鳥銃、拳法なども、其の法を習わずしては戦いのぞみて、功をなしがたし。

江戸時代の医者で儒学者でもある貝原益軒の著「武訓」

●江戸剣術流派

江戸時代の剣術における諸流派の源流は主に室町後期におこった陰流と一刀流、神道流の3つの流儀に発している。

1.陰流 開祖:愛洲移香斎久忠…伊勢出身の室町～戦国の兵法家。幼少より剣術の才能があり、諸国を回り武者修行をもって生業とした。36歳の時、日向鶴戸の岩戸で開眼し陰流を開いた。

1-2.新陰流 流祖:上泉信綱…上野国大胡城の枝城・上泉城で生まれる。藤原秀郷の子孫で大胡氏の一族。兵法家として陰流・神道流・念流などの諸流派を学び、新陰流を大成した。信綱は箕輪城の長野氏に仕えた。剣聖と呼ばれ袋竹刀を発明したと言われる。新陰流を伝授するために全国各地を巡る。

1-3.新陰流分派

・**新神陰** 流祖:野中新蔵 その後神道無念流となり岡田十松を経て斎藤弥九郎、江川太郎左衛門、藤田東湖、芹沢鴨を輩出。

斎藤弥九郎は岡田十松に学び29歳で独立。江川太郎左衛門の援助を受け飯田町に「練兵館」を開く。この道場より桂小五郎、品川弥二郎、高杉晋作ら長州藩士が集まった。

・**柳生新陰流** 流祖:柳生石舟斎(宗厳) 流儀名は俗称で正式には新陰流。徳川家康に“無刀取り”を披露し徳川の兵法師範となる。宗厳以降、五男柳生宗矩(家光の指南役)の江戸柳生と孫の利厳の尾張柳生とに分派する。

・**直心影流** 流祖:山田平左衛門(一風斎光徳) 下野の出身、宝永年間江戸へ出て道場を開き、鹿島神伝7代を称し直心影流を立てる。竹刀、防具などの改良を行うなど近代の名人にして門人多しと称される。その後門人に男谷精一郎、島田虎之助、勝海舟、天野八郎などを輩出。

2.一刀流(中条流)

戦国時代末期に鐘捲流の流れを汲む伊藤一刀斎によって創始された剣術の流儀。弟子の小野忠明(神子上典膳)が徳川将軍家の剣術指南役になったことから隆盛した。

一刀流のルーツ

・念阿弥慈恩…南北朝時代から室町時代にかけての剣客、禅僧。俗名相馬四郎。奥州相馬の生まれ、7歳のときに相州藤沢の遊行上人に弟子入りし、念阿弥と名付けられる。念阿弥は父の敵討ちをめざして剣の修行を積み、10歳で上京、鞍馬山での修行(鞍馬流)、16歳のとき、鎌倉で寿福寺の神僧栄祐から秘伝を授かる。18歳の時、筑紫・安楽寺での修行において剣の奥義を感得する。

奥山念流、判官念流、鎌倉念流ともいわれる。

江戸期には樋口定次により馬庭念流として伝わり、門人として堀部安兵衛がいる。

・中条流…南北朝時代の人中条長秀(三河拳母城主)が念流開祖の念阿弥慈恩の門に入り創始。室町幕府で伊賀守護職、恩賞方、寺社造営奉行、評定衆などを歴任、足利義満の剣術指南役を務めた剣豪。

・鐘捲流(かねまきりゅう)…戦国時代の剣豪、一刀流剣術の伊東一刀斎の師である鐘捲自斎が中条流を学び創始した流儀。

・小野派一刀流 流祖 小野忠明 その後中也派、中西派に分かれ、中西派の浅利義信から浅利義明、北辰一刀流の千葉周作に分派する。浅利の流れから一刀正伝無刀流の山岡鉄舟を輩出。

・北辰一刀流の門人 千葉榮三郎、森要蔵、海保帆平、山南敬助、伊藤甲子太郎、藤堂平助、清河八郎、平手造酒 [千葉定吉] 千葉重太郎、千葉佐那、坂本龍馬、中島三郎助。



千葉周作

3.鹿島神道(當)流

日本剣道史上最古。国摩真人を始祖とし、剣聖塚原卜伝を流祖とする古武道。槍、居合、軍法等を含む総合武道。

流祖:塚原卜伝 戦国時代の剣士・兵法家。鹿島神宮の神官の子として生まれ剣術を学ぶ。若くして武者修行に出るなど真剣勝負19回、戦場37回、木刀の試合100回負けなし、倒した相手200を超える。“鹿島の太刀”として13代足利義輝、明智光秀、細川藤孝、北畠具教、山本勘助を指南する。宮本武蔵の太刀を鍋蓋で受け止める無手勝流のエピソードは有名。

3-1.鹿島神道流の流派

・天然理心流 寛政年間、剣客近藤内蔵助が創始。神道流の剣術・居合に加え、柔術や小具足術、棒術なども鍛えた。三代目近藤周助の頃、江戸や多摩、神奈川にも指導を広げる。新選組隊長となった近藤勇は16歳で試衛館道場近藤周助の養子となり、24歳で道場を引き継ぎ、文久3年門弟をひきつれ幕府の浪士組に応じ、上洛後新選組を結成して京都守護職松平容保の支配下に入る。

理心流の本旨は気合、氣息にあった。土方歳三、沖田総司、井上源三郎、中島三郎助。

・神道精武流

会津藩の流儀として伝えられ、会津藩士として生まれた佐々木唯三郎は、神道精武流を学び、小太刀日本一と称され幕府講武所の剣術師範を務めた。幕末江戸で清河八郎を、京都見廻り組に任務し、坂本龍馬、中岡慎太郎を暗殺した。

その他の流派

4. 心形刀流 江戸の初期伊庭秀明が開いた流派。鍵の形と共に心の在り方も重視した。伊庭八郎

5.天真正自顕流(てんしんしょうじけんりゅう)

薩摩の十瀬長宗が開いた剣術流派。示現流の源流派として知られる。十瀬が香取神道流を修行し印可を得た後、鹿島神宮に参籠し、天真正自顕流を開いた。

5-2示現流…薩摩藩を中心に伝わった古流剣術。流祖は東郷重位(戦国から江戸にかけての島津藩家臣)。



三郎助の家系

17世紀後半、中島家の元は加賀藩の家臣であったが、家督相続に失敗しお家が断絶となる。中島家創始者である中島定房は寛文9年(1669年)32歳浪人の身で江戸へ出て下田奉行与力に召し抱えられる。2代目、3代目三郎衛門。5代目、6代目は他家からの養子である。三郎助の父7代目清司も書院番与力関家からの養子である。妻も他家から嫁いできている。家を途絶えさせないということを家訓としていたのではないだろうか？



中島恒太郎



中島英次郎

三郎助年表

文政4年(1821年)1月25日、8代目三郎助は浦賀奉行所与力・中島清司の子として生まれる。三男であった。

母は浦賀与力・樋田仲右衛門娘。

*若いころより砲術に才能を見せ、田付流、荻野流の免許、高島流の皆伝を受ける。また俳諧や和歌を父より手ほどきを受けた。

天保6年(1835年)浦賀奉行与力見習

天保8年(1837年)モリソン号事件で砲手を務め、報賞される。

西御丸一番組徒岡田定十郎(清司の弟)の娘すず(14歳)と結婚(17歳)。

天保9年(1838年)天然理心流・剣術目録取得

天保12年(1841年)北辰一刀流剣術入門(弘化元年目録取得)

*観音崎台場、鳥ヶ崎台場などに詰め、その間荻野流砲術などを極める。

嘉永元年(1848年)五人扶持を加増。

嘉永2年(1849年)浦賀奉行与力

弘化2年(1845年)3月マンハッタン号来航 5月浦賀で大砲制作野比沖で警備

弘化3年(1846年)閏5月、ビッドル率いるアメリカの東インド艦隊が来航。前年の来航時と共に父清司が見事な対応で艦隊は引き上げる。

10月高島流・砲術皆伝(徳丸ヶ原演習'41)

嘉永元年(1848年)28歳。長男恒太郎誕生(実の長男長女は早世)

嘉永2年(1849年)イギリスマリーナ号来航。船大工を伴い船艇実測。

*和船の設計を加えた起倒式マストの軍艦蒼隼丸竣工

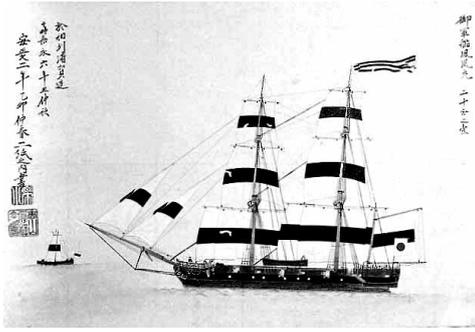
嘉永4年(1851年)31歳 二男英次郎誕生

嘉永6年(1853年)6月ペリー艦隊が浦賀沖に来航。副奉行と称して通詞堀達之助を連れ旗艦「サスケハナ」に乗船。香山栄左衛門と共にアメリカ側使者を応対。この時、船体構造・搭載砲・蒸気機関を入念に調査。
*ペリー帰国後、老中・阿部正弘に軍艦の建造と、蒸気船を含む艦隊の設置の意見書を提出。

嘉永7年(1854年)1月ペリー浦賀に再び来航。横浜で前12条の日米和親条約を締結。

1月吉田松陰は熊本藩士・宮部鼎蔵と共に、洋式軍艦を建造中の中島を訪問。父・清司にも合い、中島親子の造船や海軍に対する考えに接し、深い感銘を受け、高く評価する。

5月日本初の洋式軍艦「鳳凰丸」を浦賀で完成(着工から8ヵ月)しその副将に任命される。



安政2年(1855年)桂小五郎が中島家に寄宿し造船学を学ぶ。
10月長崎海軍伝習所開設('59閉鎖)の第一期生として入所、造船学・機関学・航海術を修める。

安政5年(1858年)築地軍艦操練所教授方出役に任命

安政6年(1859年)浦賀の長川を塞ぎ止め日本初の乾ドックを建設
万延元年(1860年)遣米使節に随行する「咸臨丸」の修理を行う

*軍艦操練所教授方頭取手伝出役に任じられるが、病気のために
文久元年(1862年)出役依願免、与力に戻った。

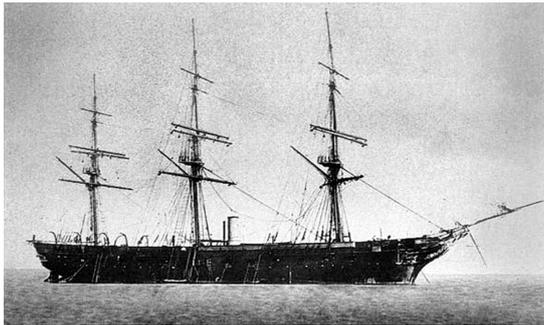
元治元年(1864年)富士見宝蔵番格軍艦頭取出役に任ぜられが再び
病気となり、慶応2年(1866年)出役依願免。

同年末与力職を長男・中島恒太郎に譲る

慶応3年(1867年)再奉公を命じられ、軍艦組出役、小十人格軍艦役
勤方を経て、両番上席軍艦役。

慶応4年(1868年)戊辰戦争勃発、海軍副総裁・榎本武揚らと行動を
共にし8月江戸・品川沖を脱出、蝦夷地へ
10月蝦夷上陸。

11月15日江差攻略戦に向う開陽丸座礁→沈没



*箱館政権(蝦夷共和国)下では、箱館奉行並、砲兵頭並を務め、千代ヶ岱陣屋を守備し陣屋隊長として奮戦

明治2年(1869年)5月箱館市中が新政府軍に占領された後、軍議では降伏を説いたが、中島自身は千代ヶ岡陣屋で討死することを公言、五稜郭への撤退勧告も、新政府軍からの降伏勧告も拒否。

5月16日、五稜郭降伏2日前、長男の恒太郎・次男の英次郎・共に戦死。享年49歳



1835年(天保6年)武蔵国多摩郡石田村(現:東京都日野市石田)の農家に生まれる。父隼人は歳三が生まれる3か月前に死亡。

1840年(天保11年) 歳三6歳の時、母・恵津が結核で亡くなる。

*土方家の次男が家督を継ぎ、その次男の妻に土方歳三は育てられる。大人になった土方歳三は、実家で製造していた「石田散薬」という薬を売る仕事をしながら、様々な道場で修行をして剣術の腕を磨く。

1859年(安政6年) 姉婿の佐藤彦五郎の紹介で日野宿の天然理心流に正式入門。この道場で天然理心流試衛館の近藤勇と出会ったとされる。

1863年(文久3年) 浪士組、京都残留派と江戸帰還派に分裂後、消滅。

八月十八の政変 御所の警備に出動「壬生浪士組」と改め後に「新選組」と名を改め活動するようになる。

1864年(元治元年) 池田屋事件。京都三条池田屋に潜伏中の長州藩・土佐藩などの尊王攘夷派志士を新選組が襲撃。

慶応3年(1867年)6月幕臣に取り立てられる
10月14日、徳川慶喜が大政奉還
12月9日王政復古の大号令

1868年(明治元年) 戊辰戦争始まる。
幕府軍の江戸撤退後、新撰組を「甲陽鎮撫隊」に改名し甲斐国に向かうが甲州勝沼の戦いで大敗。

近藤勇が板橋刑場にて斬首処刑
10月仙台を出航、蝦夷へ向かう。

1869年(明治2年) 5月11日一本木関門付近で銃弾を受け土方歳三戦死。

徳川幕府崩壊

慶応4年(1868年)1月鳥羽・伏見の戦いが始まり、薩長倒幕派は「錦の御旗」を押し立て攻勢に出る。慶喜は薩長らの西軍に全面降伏し、江戸城も放棄して、400万石という知行を没収され70万石に減封された上で駿河へと移封される。

北の警護と徳川家臣の救済という大義名分

幕府が完全に崩壊した事を受け、徳川海軍の司令官だった榎本武揚は、徳川家臣団による蝦夷地開拓の許可を新政府に嘆願するが、拒絶され榎本は、奥羽越列藩同盟と合流するため艦隊を率いて品川沖を脱走する。三郎助は、恒太郎、英次郎や、三郎助の浦賀奉行所の配下であった者達と共に開陽丸に乗り込み、この脱走に参加した

三郎助の決意

『慶応四辰年 将軍辞職ノ拳二乗シ 王側ノ奸悪恐多クモ冤罪ヲ負ハシム。此ニ於テ 北軍同盟ノ諸侯公会ヲ助テ義兵ヲ起シ 実ニ天下騒乱 戦国ノ世トナル。因テ三郎助 恒太郎 英次郎三人 主家報恩ノ為ニ出陣スル也』

三郎助の胸には、再び浦賀の土を踏む事はあるまいとの覚悟を決めていたと思われる。

函館新政府樹立に暗雲 開陽丸の沈没

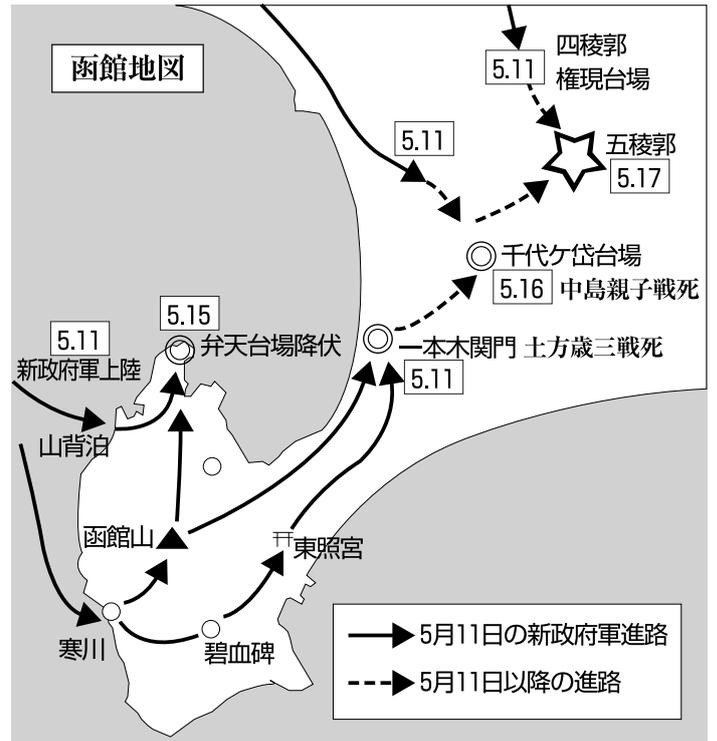
明治元年10月、榎本軍は北海道の鷲の木に上陸、同月中に箱館を占拠し、箱館市街地にあった様式要塞の五稜郭において、自治政府(箱館政権)を樹立した。

しかし榎本軍の最強戦艦開陽丸が、江差攻略戦の最中に座礁し沈没してしまう。開陽丸を中心に強力な海軍力で京都政権に対抗し列強の調停を引き出そうとしていた榎本の思惑は頓挫する事になる。

当初榎本軍を交戦団体と認めて中立を保っていた欧米各国も、開陽丸の沈没を知り中立を放棄する。

箱館奉行並 要塞・千代ガ岱陣屋守備隊長

三郎助は、箱館政権の「箱館奉行並」を拝命、戦時下では「軍艦頭並」と「砲兵頭並」の役を務め、浦賀奉行組を配下に五稜郭南側にある要塞・千代ガ岱陣屋(五稜郭の支城、大砲5門の砲台)の守備隊長として戦いに臨んだ。



函館戦争の終焉

明治2年4月9日、新政権軍は蝦夷の江差北方から上陸を開始、函館政府軍との本格的な戦闘が始まる。激戦の末、4月末に函館政府軍は全部隊が箱館平野に追い詰められ、翌5月11日に、京都政権軍は五稜郭に向かって進撃を開始し、函館政府軍に対して最後の総攻撃が始まった。

三郎助親子の最期

11日、土方歳三が一本木で戦死 千代ガ岱陣屋も攻撃を受けて三郎助は腹部に敵弾を受ける。腹部に被弾した三郎助は、病院に入るよう勧められるが、頑として受け入れずに戦い続けた。新選組が守っていた弁天台場も降伏

15日、榎本は千代ガ岱陣屋から全員五稜郭に引き揚げよう命じるが、三郎助はこれを拒否し、徹底抗戦を主張し陣屋に留まる。16日午前3時頃 新政権軍の猛攻撃を受け、もはやこれまでと三郎助は白兵の接戦に出る。恒太郎(22歳)、次男英次郎(この時19歳)と共に刀を抜いて敵部隊に突入し、壮絶な戦死を遂げた。



『郭公(ほととぎす)我も血を吐く思ひかな』

俳諧宗匠 木鶏(三郎助)

三郎助は浦賀の俳諧宗匠として知られていた。最期の地函館でも俳句を嗜む土方歳三と共に俳句を詠んでいた。上の句は辞世の句で、死を覚悟しつつも二人のわが子を道連れにしなければならない苦しい胸の内を吐露している。

さざ波のままにみぎはの氷かな

ともしびのゆれるほど湧く清水かな

水際はことに色よきもみじかな

〈和歌〉

うつせみの仮のころもを脱ぎ捨てて名をや残さむ千代ヶ岡辺に

木戸孝允(桂小五郎)との交友

「先生は実に清廉潔白な人だった。先生のかたわらにいと、心潔く 身の清らかになる思いがした」

木戸は安政2年(1855年)、中島家に寄宿し造船学を学んだ。短期間の付き合いだったが、三郎助は木戸の才幹を認めて家族ぐるみで厚遇した。



木戸は明治政府の高官となったのち、酒席で中島父子の戦没を聞かされ、酒を下げさせ嘆息した。明治8年(1875年)に窮迫した三郎助の妻が自邸を訪問するや歓喜し、恩師の厚情を語った。榎本に諸事万端遺族の保護を依頼した。明治9年(1876年)、明治天皇の東北巡幸に随従して五稜郭に向かう途中、中島父子の戦死地付近を通過した時、木戸は人目をばかすことなく慟哭したという。

高松凌雲の三郎助評

「真に強い人ではあったが冗談が好きな面白い人物だった」

凌雲は徳川幕府の御殿医だったが、徳川昭武の渡仏に同行し、西洋医学と共に、医術の精神も学んで帰る。函館戦争では函館軍病院を設け、戦病者を新政府軍、函館政府軍の分け隔てなく患者を見た。



後の日本赤十字の創設の礎となった。

妻すずへの手紙

三郎助が蝦夷地へ渡る頃、妻すずは駿府の留守宅を守っていた。その妻あてに、三郎助が書いた手紙。

「私は、病気がちで若死にと思っていたが、はからずも49年も生きられた。天の助けともいうべきことだ。今度はいよいよ決戦で、いさぎよく討ち死にと覚悟している。

しかし、恒太郎、英次郎、そして浦賀から来た者も、同様の決意をしているのは、実に心苦しい。何度も翻意するよう説いたが、聞き入れない。もう仕方がないと思っている。榎本殿らは、五稜郭に籠って、討ち死にの覚悟。いずれ、あの世でお会い致しましょうと、笑ってお別れした。

そなたには、不肖私への永年にわたるお尽くし、改めてお礼を申し上げます。心を強く持ち、賊臣の妻と後ろ指をさされようともくじけず、子らをよろしく頼む。もし、男児が生まれたなら、私の心を継いで、徳川家の大きな御恩を忘れず、忠勤に励んで欲しい」

三郎助の子孫

三郎助親子が江戸を離れる頃、妻すずは身ごもっており、慶応2年の2月に三男與曾八を出産する。

三郎助の没後は香山栄左衛門、木戸孝允、榎本武揚らの支援を受け成長し、明治16年(1883)海軍機関学校に入学、同年東京大学法科大学を主席卒業する。

その後海軍少機関士に任官。巡洋艦「筑紫」などの乗組となる。明治21年海軍中佐に進級、日清戦争に参加する。海軍大学校の教官や海軍機関大監などに従事、また蒸気タービン国産化に尽力する。

◆参考資料

旺文社 戦国・幕末の群像 榎本武揚

旺文社 戦国・幕末の群像 勝海舟

くろふね(角川文庫) 佐々木 譲

千歳櫻 幕臣 中島三郎助 文芸社

HPみなみ北海道 最後の武士達の物語

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

英霊の鎮魂 鶴よ舞え千代の台場に



若き日の三郎助が大砲を放った千代ヶ崎台場
千代ヶ崎砲台跡のある平根山には1811年(文化8年)に会津藩によって台場が築造されました。1837年(天保8年)来航した米国商船「モリソン号」に対しここから大砲を発砲する事件が起きました。その後この地の砲台は海岸よりに築かれ千代ヶ崎台場として文久3年(1863年)まで使用された。明治以降も東京湾要塞として近代式の砲台群が設けられた。



わが子と共に壮烈な最期を遂げた千代が岱陣屋
文化5年(1808年)日露関係の悪化により、蝦夷地の守備として仙台藩が千代ヶ岱に築いた陣屋が始り。その後同地の守備を受け持った津軽藩が東西130m、南北145m土塁3.6mの陣屋を建設した。函館山へ向う台場は新政府五稜郭を守る砦であった。現在この激戦の地は三郎助を讃え「中島町」と名付けられた。